



キャンパス・コラム

たまには日常を離れて

昨夏高校生の娘を連れてお台場の科学技術未来館（愛称はMe Sci、私と科学という意味らしい）を訪れた。宇宙飛行士の毛利さんが館長をしていて、最先端の科学の成果を展示している。テレビなどで紹介されたばかりのものが目の前に並んでおり、触って体験できるよう工夫されたものも多い。説明のパネルだけでは分りにくいのが、館員がていねいに説明してくれる。来館者と館員の触れ合いを重んじるのが館長の方針なのだそうだ。

仕事で付き合いのあるM化学の女性研究者が説明員をしていたので詳しく聞いたら、実は館員はボランティアの方がずっと多いそうである。彼女も家庭もちだが、月に数回、日を決めて説明員を引き受けているという。来館者の多い休日なので忙しいが、自分の勉強にもなり、楽し

いそうだ。

理科音痴の娘もニュートリノ天文学で使っているカミオカンデの特大的検出器（光電子増倍管）を熱心に見ていた。巨大電球だとも思ったのだろう。秋になって小柴博士のノーベル賞が発表されたとき、「あのとき見ていた大きなガラス管球を使った研究で受賞したんだ」と言ったら、「へーっ」と驚いていた。少しは科学が身近に感じられたらどうか。

この頃の若者は自分のすぐ身の回りにあるものにしか関心がないという。そう言えば、「尊敬する人物」を書かせると、「両親」と書く学生が大変多い。他の人間や彼らの成しとげたことに対してほとんど興味がないのではないかと心配になる。うちの子も『プロジェクトX』は見たがらないなあ。でも、オジさんたちの関心と重なりが全然ないと就職のとき困らないかな。たまには日常生活とかけ離れたものに触れて自分の世界を広げておけばよいのに。せっかく何かと便利な東京にいるのだから。

広報委員 新藤 斎（理工学部教授）